学位論文要旨

韓国における剣道の普及に関する研究
―学校剣道を中心に―

金　炫　勇

Ⅰ．論文題目

韓国における剣道の普及に関する研究　―学校剣道を中心に―

Ⅱ．目　次

序章　研究の背景と研究目的
　第１節　問題の所在
　第２節　先行研究の検討
　第３節　用語について
　第４節　研究目的
　第５節　研究方法

第１部　韓国における学校剣道の変遷
　第１章　韓国における剣道の導入期
　第２章　植民統治期の朝鮮における学校剣道
　第３章　戦後の韓国における学校剣道

第２部　韓国青年における剣道の捉え方
　第１章　剣道の経験度による比較
　　第１節　研究目的
　　第２節　研究方法
　　第３節　結果及び考察
　第２章　男女による比較
　　第１節　研究目的
　　第２節　研究方法
　　第３節　結果及び考察
　第３章　剣道の体育特技生とナショナルチーム剣道選手の比較
　　第１節　研究目的
　　第２節　研究方法
　　第３節　結果及び考察
　第４章　意識調査のまとめ

結章
　第１節　本研究の成果と意義
　第２節　今後の課題

主な引用・参考文献

Ⅲ．論文要旨

序章　研究の背景と研究目的

第１節　問題の所在

近年、剣道の国際化に伴う諸問題が浮かび上がる中、剣道の韓国起源説や韓国における剣道の商業化が指摘されている。また、韓国国内においては、若者の剣道離れや剣道の体育特技生の減少が大きな課題となっている。日韓の間には歴史に起因する大きな溝が存在し、政治論争として激化するケースもあることを考えると、韓国における剣道史を正しく伝える必要がある。また、若者の剣道離れや剣道の体育特技生の減少問題を考えると、韓国青年を対象にした剣道の捉え方の実態を把握し、今後の改善策を講じる必要がある。

第２節　先行研究の検討

韓国の剣道史に関する研究をまとめると、民族主義の視点から韓国剣道の正統性を確保するため古代史に焦点を当てたもの、日本統治時期の植民主義体育の精算という視角から日本統治時期の剣道を考察したもの、さらに、戦後、剣道組織の発展史や国際大会における韓国チームの競技力の顕在化に焦点を絞ったものなど、大きく 3 つに分けることができる。韓国における剣道が民族主義、ファシズム、歴史修正主義、反日、克日など、イデオロギーや体育政策との関わりの中で発展してきたことを考えると、それらとの関連から剣道史を分析する必要がある。しかし、学校剣道の発展過程に焦点を当てた研究や、イデオロギーや各政権における体育政策から、学校剣道について分析した研究はみられない。

また、韓国における剣道に関する意識等に関する実態調査は、私設剣道場に通う剣道愛好家や世界選手権大会における韓国チームの競技力の顕在化による韓国選手の実態把握に焦点を絞ったものが多く、近年の若者の剣道離れや学校体育としての剣道の台頭などが反映されているものとはいえない。

第３節　用語について

本研究で用いる主な用語としては、「専門体育」と「生活体育」がある。専門体育は体育特技生が行う運動競技活動であり、生活体育は一般学生が健康と体力増進のために行う自発的かつ日常的な体育活動である。剣道の体育特技生とは、体育特技生制度に基づいて、学校の剣道部に所属し、体育団体に登録され剣道選手として活動する学生を意味する。一方、「学校剣道」は、「体育授業としての剣道」と「運動部活動としての剣道」からなる。体育授業としての剣道は、各学校の体育授業として取り扱われるものである。運動部活動としての剣道は、授業外の課外活動として有志により組織された剣道部において取り組まれるもの（練習や大会参加等）である。また、「撃剣」が導入された時期には様々なルーツから日本式剣術が紹介・導入されており、これらが後の剣道として定着したと考えられる。そのため、今日の剣道の発展過程につながったと考えられる「撃剣」、「銃剣術」、「剣道」などの名称を研究対象にした。

第４節　研究目的

本研究においては、韓国における学校剣道の普及に寄与する知見を得ることを目的とした。そのために、以下の課題を設定した。

第１に、韓国における剣道の歴史及び学校剣道の変遷を明らかにする。これによって、剣道の韓国起源説や韓国の剣道に関する誤謬について省察し、より正しく理解することができると考えられる。また、韓国における剣道の歴史と発展過程を学習者に正しく伝えることができると考えられる。

第２に、韓国青年を対象とした剣道に対する意識を明らかにすることである。まず、剣道の経験度別に分類し、経験度による特徴を明らかにする。次に、剣道に関する意識について、男女別の特徴を明らかにする。さらに、戦後の韓国の学校剣道の中心となってきた剣道の体育特技生とナショナルチーム剣道選手を対象にして、韓国を代表する専門剣道家の剣道に対する意識の実態を明らかにし、今後のあり方を追究する。

第５節　研究方法

本論文の内容は、第１部と第２部の２部構成からなる。

第１部の研究方法としては、文献研究を用いた。まず、第１章では、『高宗実録』『純宗実録』をはじめ、剣道導入期の歴史記述がみられる『大韓体育会 70 年史』『大韓剣道会 50 年史』や剣道の歴史に着目した先行研究をもとに韓国における導入期における学校剣道について考察した。次に、第２章では、朝鮮総督府の朝鮮国民に対する教育及び体育政策とその変化が反映されている「朝鮮教育令」「学校体操教授要目」をはじめ、植民統治期の剣道に関する記録がみられる各種新聞記事、『大韓剣道会 50 年史』及び植民統治期の体育史に着目した先行研究をもとに、韓国における植民地統治期における学校剣道について考察した。さらに、第３章では、戦後の剣道史がみられる『大韓剣道会 50 年史』『大韓剣道会会報』をはじめ、剣道に関する記録がみられる各種新聞記事、戦後の剣道史に着目した先行研究をもとに、戦後の韓国の学校剣道について考察した。

第２部の研究方法としては、調査研究を用いた。詳細は各章に示すが、韓国の首都圏に在籍している青年（高校生、大学生、剣道の体育特技生、韓国ナショナルチーム剣道選手）を対象に、日本の剣道界において若者の剣道離れが大きな課題となった昭和 60 年代、その改善策を探るために日本の全国教育系大学剣道連盟研究部会（1993、以下全教剣とする）により作成された調査票をもとに、剣道に対する意識調査を行った。全教剣における調査対象者と今回調査の対象者では剣道の経験度に異なる様相がみられた。この相違は日韓における学校剣道の普及の様相の相違を表していると考えられ、結果の考察にあたっては十分に留意して進めた。

第１部　韓国における学校剣道の変遷

第１章　韓国における剣道の導入期

西南の役で活躍した日本の警視庁抜刀隊の「撃剣」が注目され、朝鮮の警務庁の教習科目として導入されたことが、韓国における剣道のスタートであった。しかし、その後、1894 年の「甲午更張」と翌年の「乙未事変」を機に、体育そのものが民族運動の道具として捉えられる中、「撃剣」もその役割を担う体育科目として位置づけられていった。そして、学校体育として「撃剣」が導入されたのは、1904 年 8 月体育教師を養成するため設立された「陸軍研成学校」においてであった。このように、韓国における剣道は朝鮮政府の政治的理由により導入され、学校体育として体系化されていった。

第２章　植民統治期の朝鮮における学校剣道

1916 年五星学校では剣道場を設け、朝鮮の一般青年を対象に「撃剣」を指導していた。五星学校における剣道は、韓国における学校剣道（運動部活動）の嚆矢として捉えられていた。朝鮮人の私学において軍事訓練を思わせる全ての体育を厳しく統制する中で、剣道及び柔道については配慮があったと考えられる。

その後､1919 年 3 月に起きた全国的な独立運動をきっかけに朝鮮総督府の基本方針が大きく変わる中、1927 年には改正学校体操教授要目が公布され、剣道が初めて朝鮮人にも体育科の随意科目として導入された。また、中学校や専門学校において運動部の組織化が促された。一方、日本留学から帰国した留学生たちは専門学校に剣道部を設置し、学校間の交流試合を頻繁に行っていた。1931 年中学校令施行規則が改正され、剣道及び柔道が体育授業として必修化され、1935 年には第 16 回全朝鮮体育大会から剣道が正式種目になるなど、剣道は朝鮮国民に人気が高い種目となった。さらに、1937 年中学校体操教授要目が改正され、剣道や柔道の教授内容及び方法が初めて示されるようになり、剣道の授業内容も徐々に体系化されていった。

しかし、皇国臣民統治期に移行し、1937 年の日華事変を境に、教育においては総力戦の体系化教育が推進される中、大日本帝国剣道形をかたどった皇国臣民体操が考案され、年齢や性別を問わず、体育授業として行われるようになった。さらに、1941 年には国民学校令が公布され、体操科が体錬科となり、学校体育が戦時体制における軍事訓練と化していく中、剣道は朝鮮国民の反日感情の対象になっていった。そして、戦後、剣道は韓国のナショナルカリキュラムから外されていった。

第３章　戦後の韓国における学校剣道

戦後、韓国の学校剣道は、連合国総司令部が混乱する韓国国内の秩序と治安維持のため、日本統治時代の警察をそのまま存続させる中、日本留学の経験者である徐延学という人物によって提案され、警察組織を中心に徐々に復活していった。しかし、戦後復活した学校剣道は一般学生を対象にする体育授業としてではなく、警察大学校や陸軍士官学校など、特殊機関学校の生徒たちの尚武精神を培う武道として導入されていた。反日感情が高くなる中、その突破口として韓国の伝統文化としての剣道が強調されていた。その一環として、新羅や朝鮮に伝わる剣術を、文献から発掘し現代に蘇らせ、昇段審査に導入するなど、独自的な普及を検討していた。このような一連の動きが剣道の韓国起源説や剣道の韓国化につながっていたと考えられる。

一方、1965 年 6 月日韓国交正常化協定が締結され、戦後初めて政府次元での日韓交流が再開することとなり、1966 年城南高等学校の来日を皮切りに日韓の剣道交流が始まった。特にこの時期には、ナショナリズムと政府の体育政策が結びついた体育特技生制度が法令化されることにより、体育特技生の専門体育としての剣道がスタートした。そして、学校剣道部が急激に増加する中、学生剣道連盟が分化し、学生を対象とした剣道大会も急増した。

その後、ソウルオリンピック前後に高まった国民のスポーツに対する興味・関心と、それをサポートする国民生活体育振興総合計画の相乗効果により、剣道は生活体育としても注目されるようになっていった。そして、マスコミも剣道を頻繁に取り上げるようになり、韓国国民の剣道への興味・関心は一層高まり、2008 年には剣道人口が 60 万人に達した。

このような社会的要請により、2000 年以降、学校体育として剣道を導入する学校が徐々に増えていっ

た。そして、2007 年には韓国の剣道界の長年の念願であった体育科における種目化（選択科目）が決まり、さらに 2008 年伝統武芸振興法が法令化され、日本から流入された剣道も韓国の伝統文化として加えられた。2007 年改訂教育課程においても伝統が強調され、剣道を選択する学校が増える可能性が高まっている。しかし、教育課程には剣道の学習のねらいや内容、さらには指導方法等が一切示されていない。また、大韓剣道会は、私設剣道場等において剣道を指導するための指導内容や指導方法をまとめて指導教本等を定めていない。このことは、剣道に興味関心を持つ韓国青年のニーズとズレを生じさせている可能性もあり、韓国青年の剣道離れを引き起こす原因となっていることも考えられる。このような状況を考えると、剣道授業のねらいや学習内容、指導方法を構築することは急務である。

第２部　韓国青年における剣道の捉え方

第１章　剣道の経験度による比較

第１節　研究目的

韓国人の剣道に対する意識や実態に関する先行研究においては、韓国人が剣道の国際化や競技化に積極的であることから、韓国人は剣道をスポーツ的に捉えているとしている。しかし、日本青年を対象にした先行研究においては、剣道の経験が長くなるほど、剣道に関することがらを肯定的に捉えるようになり、スポーツ的志向から武道的志向へと変わるとされている。韓国青年においても同様の結果が予測され、本章においては、この点を実証的に明らかにすることを目的とした。

第２節　研究方法

本章では、表 1 に示したように、韓国の首都圏に在籍している高校生、大学生、剣道の体育特技生 2,026 名を対象者とし、調査には、日本の全教剣により作成された調査票を援用し、各項目を韓国語に訳した調査票を用いて行った。回答は「1. そう思わない」から「5. そう思う」の 5 件法とした。経験度別の対象者は「経験なし」1,575 名、「授業だけ」255 名、「経験あり」196 名であった。統計処理には一元配置分散分析及び多重比較を行い、すべての検定の統計学的有意水準は 5%未満とした。

表 1　調査対象の特性

カテゴリー	項目	韓国青年（n=2,026）	
		男子（n=1,010）	女子（n=1,016）
在籍学校	高校生	386（38.2%）	482（47.4%）
	大学生	490（48.5%）	472（46.5%）
	剣道の体育特技生	134（13.3%）	62（6.1%）
剣道の経験度	経験なし	760（75.2%）	815（80.2%）
	授業だけ	116（11.5%）	139（13.7%）
	経験あり	134（13.3%）	62（6.1%）

第３節　結果及び考察

剣道の経験がない者は、スポーツ的に捉える傾向がより高かった。彼らにとって剣道のイメージは、礼儀作法やよい姿勢に役立つスポーツであり、剣道界の提唱している内面的なことがらまで形成されないと捉えていた。しかし、剣道の伝統的なことがらには興味を示していた。一方、剣道のルールや安全性については否定的に捉えており、剣道の練習は他のスポーツに比べ厳しいというイメージを持っていた。さらに、剣道の経験がない者も剣道のオリンピック種目化や国際化に賛成していることが明らかとなった。

剣道の授業を受けた者は、剣道授業を受けることによって、スポーツ的に捉える考え方が変わり、やや武道的に捉えるようになることが明らかとなった。剣道が持つ独特な雰囲気や精神・哲学を授業の中で適切に取り入れることが、学習者の動機づけにもなることが示唆された。また、剣道のルールや安全性に対しては相変わらず課題を残しており、剣道のルールをより分かりやすく説明する工夫や安全性確保の必要性が示唆された。

剣道の経験が長い者は、武道的に捉える傾向がより高く、剣道は内面的なことがらまで形成されると考えていた。しかし、剣道の安全性については否定的に捉えていた。その理由としては、試合の結果次第で進学が決まるため、猛練習の結果、ケガをした経験などが安全性を否定的に捉える結果につながったものと考えられる。

第２章　男女による比較

第１節　研究目的

韓国青年の剣道に対する意識について、男女別の特徴を明らかにすることを目的とした。

第２節　研究方法

調査対象者及び内容については第２部第１章と同様である。対象者を性別からみると、男子 1,010 名、女子 1,016 名であった。男女の比較では、対応のない t 検定を行った。

第３節　結果及び考察

韓国青年の男子は、剣道をスポーツ的かつ武道的に捉える傾向がみられた。剣道は礼儀作法、よい姿勢、自己規律を身につけるために役立つと捉えていたものの、内面的なことがらまでは形成されないと捉えていた。また、段位より年齢を重視する傾向がみられた。剣道に興味・関心が高かったものの、男子は途中で剣道をやめてしまう傾向が、女子より高かった。その原因として、男子の方が他のスポーツや文化的活動に興味・関心が高いのではないかと考えられる。そのため、剣道授業の際には、基本動作や技術の習得時間を短縮し、毎回の授業の最後に簡単な練習試合をさせるなど、楽しい剣道授業を工夫する必要性があると考えられる。

韓国青年の女子は、剣道をスポーツ的に捉える傾向がやや高かった。剣道は姿勢の矯正に優れていると捉えていた。また、剣道は老若男女が対等に競い合えるという剣道の対等性に魅力を感じていた。女子は、剣道の安全性、修練の厳しさ、ルールの難しさなどに抵抗感のあることが明らかとなった。そのため、剣道授業の導入の段階で、柔らかい竹刀を開発するなど、剣道は痛くも怖くもなく安全であると

いう印象を与える必要があり、また、剣道のルールをより分かりやすく説明するなど、性別の特性をふまえた工夫を重ねる必要性があると考えられる。

第３章　剣道の体育特技生とナショナルチーム剣道選手の比較

第１節　研究目的

剣道の体育特技生とナショナルチーム剣道選手（韓国を代表する専門剣道家）の剣道に対する意識の特徴を明らかにすることにより、韓国を代表する専門剣道家の実態と今後のあり方について追究することを目的とした。

第２節　研究方法

調査対象者として、剣道の体育特技生は、韓国の首都圏の大学に在籍している剣道の男子体育特技生を対象者 100 名とした。また、ナショナルチーム剣道選手は、「第 14 回世界剣道選手権大会」出場の男子韓国代表候補選手 11 名を対象者とした。調査内容については第２部第１章、第２章と同様である。両群の比較では、対応のない t 検定を行った。

第３節　結果及び考察

剣道の体育特技生は剣道を武道として捉え、剣道を修練することによって、特に礼儀作法やよい姿勢が身につくと捉え、また、剣道の伝統的な雰囲気や習慣を守り伝承していくべきであると捉えていた。一方、剣道試合でのにぎやかな声援をある程度認めていた。これは剣道を武道として捉える結果とは矛盾することであり、韓国における剣道試合の現状が反映された結果ではないかと考えられる。

ナショナルチーム剣道選手はスポーツ的志向がやや高かった。しかし、剣道の伝統的な雰囲気を重視し、剣道修練をとおして内面的なことがらまで形成されると捉えており、剣道をスポーツ的に捉えているとは言い切れないところが多くみられた。多くの項目において、ナショナルチーム選手を取り巻く勝利至上主義の影響が考えられる。

両者ともに剣道の安全性についてはやや否定的に捉えており、厳しい練習や勝利重視など、彼らを取り巻く環境から生じるケガの多いことがうかがえた。

第４章　意識調査のまとめ

意識調査の分析結果から、以下のようなことが示唆された。

まず、剣道授業では技能学習だけではなく、武道的特性を学ばせる学習内容や指導方法が求められ、剣道の経験度に応じた工夫が重要となると考えられる。

男子の場合は、学習の際、基本動作など同じことの繰り返しをできるだけ少なくし、試合の楽しさを伝える工夫をする必要があり、一方、女子の場合は、比較的苦通を伴わない形（型）中心の学習を取り入れることも有効であると考えられ、男女それぞれの特性を踏まえた学習指導が求められる。

剣道の体育特技生とナショナルチーム剣道選手は、剣道がもたらす教育的効果や剣道ならではの伝統及び文化を尊重しており、これを守るべきであるとしていた。このことから、たとえ剣道が国際化し、スポーツ化したとしても、剣道の武道的要素は失われないように配慮すべきであると考えられる。

終章

第１節　本研究の成果と意義

本研究の成果と意義をまとめると以下のとおりである。

第１に、韓国における剣道の歴史及び学校剣道の変遷を明らかにしたことがあげられる。これによって、近年、国際社会で浮かび上がっている剣道の韓国起源説の問題解決に貢献できたと考えられる。また、韓国の剣道に関する誤謬、たとえば、「韓国には一般学生を対象にする剣道授業はない」「剣道の世界選手権大会の入賞者は年金がもらえる」「韓国主導で剣道がオリンピック種目になれば、剣道はスポーツへと変質してしまう」などについて精察し、より正しい理解をすることができたのではないかと考えられる。また、韓国の学校剣道の歴史とその特徴を明らかにしたことは、体育教育学的にも有意義であると考えられる。具体的には、韓国における最初の剣道導入の記録がみられる『高宗実録』『純宗実録』を分析し、剣道導入に関する詳細を明らかにしたことである。先行研究では、剣道に関する最初の記録が『高宗実録』にみられると指摘はしているものの、『高宗実録』『純宗実録』の内容を分析し、剣道の導入時期の様子を具体的に示したものは他にみられない。本研究によりその内実が明らかになったことは大変意義あるものと考えられる。

また、各時代におけるイデオロギーや体育政策の変遷に焦点づけ、剣道及び学校剣道の変遷とその特徴を明らかにしたことがあげられる。これにより、剣道が民族主義、ファシズム、歴史修正主義、反日、克日などのイデオロギーや韓国政府の体育政策に応じて、極めて流動的に変遷してきたことが明らかになったと考えられる。イデオロギーと各政権の体育政策の変化に焦点づけて学校剣道の変遷を説明したものは従来の研究ではみられないものであり、韓国の剣道史を把握するうえで意義あるものと考えられる。

第２に、韓国青年を対象にした剣道に対する意識調査により、経験度、男女、剣道の体育特技生とナショナルチーム剣道選手、それぞれの特徴を明らかにした点は、今日課題となっている若者の剣道離れ問題（剣道の体育特技生減少問題を含む）や今後の剣道授業づくり及び剣道指導において大変参考になる資料となるものと考えられる。具体的には、まず、経験度による剣道の捉え方の相違を明らかにし、経験度による授業展開の必要性や指導のあり方を提案するポイントを示したことである。また、男女の剣道の捉え方の相違を明らかにし、それぞれの特性をふまえた授業構成や指導内容を提案するポイントを示したことである。また、剣道の体育特技生とナショナルチーム剣道選手の剣道の捉え方の相違を明らかにし、韓国を代表する専門剣道家の実態からも、学校剣道・剣道授業のあり方を提案するポイントを示したことである。

韓国人の剣道の捉え方や意識に関する従来の研究では、韓国人が剣道の国際化（海外普及、オリンピック種目化）や競技化（電子防具の提案）に積極的であることから、韓国人は剣道をスポーツ的に捉えていると報告されてきたが、本研究において、韓国青年は剣道をスポーツとしても武道としても捉えていることが明らかになった。これは、戦後、スポーツとして再出発した剣道そのものの変容が武道的特性を持つスポーツ、すなわち「ハイブリット剣道」（Alexander Bennett、2005）として捉えることに影響を与えたものであると考えられる。本研究において、剣道の経験がない者からナショナルチーム選手に至るまで、韓国青年の多様な剣道の捉え方、剣道に対する考え方を実証的に明らかにした点は、今後、韓国の剣道の普及、発展に資するものとなることが期待される。

第２節　今後の課題

今後、韓国の剣道及び学校剣道の歴史を正確に把握し、今後の普及・発展の具体策を検討するためには、1965 年と 1981 年に提出された建議案とその取扱いについてより詳細に追検討することが必要であると思われる。それとともに、学校における剣道授業や剣道部等における指導内容や指導方法についても言及することも必要である。また、若者の剣道離れ問題を考察するためにも、本研究で言及した剣道の継続要因を中心とした項目のみならず、剣道の阻害要因についても精査し、異なる観点からも指導現場に提案するポイントを示すことが今後の課題としてあげられる。

主な引用参考文献

Alexander B. (2005)『日本の教育に“武道”を-21 世紀に心技体を鍛える』4 章　剣道の黒船―韓国―剣道の国際普及とオリンピック問題―. 明治書店：東京, pp.336-359.

Alexander B. (2012)『武道論集Ⅲ―グローバル時代の武道』第 4 章　武道のグローバルな展開に向けて. 国際武道大学武道・スポーツ研究所：千葉, pp.216-218.

安敏錫（2011）韓国のスポーツ政策とコーチング・システム：韓国におけるエリートスポーツ政策の現状と課題―エリートスポーツ選手育成システムを中心に―. 日本コーチング学会第 22 回大会基調講演, 9-14.

Choi, D. (2008)『開港と朝日関係』. 独立記念館韓国独立運動史研究所：ソウル.

大韓剣道会（2003)『大韓剣道会 50 年史』. 社団法人大韓剣道会：ソウル.

大韓体育会（1990)『大韓体育会 70 年史』. 社団法人大韓体育会：ソウル , pp.33-85：pp. 610-611.

学校体育振興法（法律第 11690 号). www.lawnb.com（参照日 2013 年 3 月 23 日).

Gang, Y., Kim, D. and Jeong, H. (2008)『韓国独立歴史 17：1910 年代国外抗日運動Ⅱ：中国, 欧米, 日本』. 独立記念館韓国独立運動研究所：ソウル.

Gwak, A., Gwak, G. (2009) 韓国陸軍士官学校の体育活動に関する史的考察. 韓国体育史学会, 14 (3)：169-183.

Gwak, G., Lee,H. (2010) 舊韓末の韓国体育の成立. 韓国体育史学会, 冬季国際学術大会資料集, 3-21.

井島章・岩切公治・井上哲郎・朴東哲（2000）韓国における剣道の意識調査：韓国及び日本の大学生を比較して. 国際武道大学研究紀要, 16： 191-196.

石川裕之（2014）韓国における国家カリキュラムの革新とグローバル化. 教育学研究, 80 (2), 214-225.

岩切公治・井島章・井上哲郎・朴東哲（2000）韓国における剣道の実態調査. 国際武道大学研究紀要, 16： 213-217.

Jeng, S. (1992) A Research on Understanding of Kumdo for Korean. Graduate School Education of Sung Kyun Kwan University ：12-36.

加藤純一（2006）日韓剣道技術用語の対比と特徴. 目白大学人文学研究, 3：123-135.

木原資裕（1993)『青年の剣道に対する意識』―男女について. 全国教育大学剣道連盟研究部会：大阪, pp.29-52.

金炫勇（2007）韓国の青年における剣道の捉え方に関する研究. 広島大学大学院教育学研究科修士論文抄録, 255-256.

金炫勇（2010）韓国剣道ナショナルチーム選手の剣道に対する意識―韓国剣道大学選手との比較から―. 広島大学大学院教育学研究科紀要第二部（文化教育開発関連領域），59：345-352.
金炫勇・草間益良夫（2011）韓国青年における剣道の捉え方に関する研究：剣道の経験度による比較から.広島体育学研究，37：1-10.
金炫勇・高田康史（2012）韓国青年の剣道に対する意識に関する一考察：男女比較を中心に.武道学研究，45（1）：57-69.
金炫勇（2014）韓国における剣道の導入時期に関する一考察. 武道学研究，46（2）：87-98.
Kim, Y.（1999）A study on the developmental process of the sword art(Kumdo、Gumsul)in Korean sports history. Department of Physical Education Graduate School of Myong Ji University ：博士論文.
Kim, Y.（2005）A study of characteristics of sword art training, or Kumdo, in Korean schools during Japanese colonial period. Department of Physical Education Graduate School of Young-In University, 8-58.
『高宗太皇帝実録』. 33巻，1895年5月23日付：韓国.
『高宗太皇帝実録』. 47巻，1906年2月9日付：韓国.
国家教育課程情報センター(National Curriculum Information Center). www.ncic.re.kr.
草間益良夫（1993）青年の剣道に対する意識-高校生・大学生を対象として.全国教育大学剣道連盟研究部会：大阪，pp.13-28.
Kwang, D.（2003）The comparison and analysis of Kendo culture in Korea and Japan.Graduate School of Education Sogang University.
Lee, I.（1997）A study on the actual condition and problems of Korean art of fencing. Graduate School Education of Myong Ji University.
Lee, J.（1983）A study on the history of Korean ancient Kumdo-chiefly on the Art of Bonkukkum of Shilla dynasty-. Graduate School Education of Sungkyunkwan University, 3-44.
文部科学省ホームページ.資料：韓国―スポーツ政策（2011），www.mext.go.jp（参照日2013年10月12日）.
文部省. 国民学校令の解説，http://binder.gozaru.jp/223-ko.htm（参照日2013年10月3日）.
日本武道学会剣道専門分科会.2009年3月7日付.
Na, Y.（2011）近代文化遺産としての体育分野の目録調査研究と体育研究における記録と遺物の重要性. 韓国体育史学会2011年冬季学術大会，20.
百鬼史訓（2014）『体育の科学』―竹刀と剣道具（防具）の安全性―. 杏林書院：東京，64（9）：608-612.
西尾達雄（1992）朝鮮における1914年「学校体操教授要目」制定期の体育政策について.日本教育史学，35：122-140.
西尾達雄（2010）韓国近代体育と植民地支配.韓国体育史学会2010年冬季国際学術大会論文，25-34.
小田佳子・近藤良享（2012）日本剣道ＫＥＮＤＯの国際発展への課題：韓国剣道との相克を中心に.体育・スポーツ哲学研究，34（2）：125-140.
Park, D.（2007）The current status and domestic development process of Kumdo.The journal of Korean Alliance of Martial Arts, 23（1）：28-39.

Park,D. (2010) 剣道指導法. 剣道会報第 85 号, 大韓剣道会, 35-38.
朴金洙 (2011)『朝鮮の武と戦争』. 知識チャンネル：ソウル.
Park, S. (2005) The Relationship between the practice of Kumdo and the development of the sociability of the youths. Department of Exercise Science Graduate School Chung-Buk National University, 5-22.
朴周鳳 (2014) 花郎道の意味創造と武道・スポーツ的融合　第 1 回国際武道会議. 日本武道学会第 46 回大会, 第 46 巻別冊.
Shin, S. (1984) A study on values of Kumno in physical education of society. Graduate school Education of Sungkyunkwan University, 1-33.
Sim, S. (2007)『近代新聞に現れた武芸資料の特性と意義：近代新聞１』. 国立民俗博物館：ソウル.
申琦徹・申瑢徹編著 (1974)『新我が言葉大辞典』. 三星出版社：東京.
杉原隆 (2008)『新版運動指導の心理学』. 大修館書店：東京.
角正武 (2006) 人を育てる剣道. 月刊「武道」, 5：49.
植原吉朗・Alexander, B.・Michael, K. (2005) 剣道の国際的普及に伴う文化性・競技性の認識変容に関する国際調査の試み. 日本武道学会第 30 回大会資料.
Youn, S. (1998) The study about the development of Korean Kumdo before and after modernization. Graduate School of Kook Min University.
全日本剣道連盟ホームページ.　http://www.kendo.or.jp/kendo/origin/. 剣道に関する全剣連の見解.